校長のつぶやきⅡ

校長室便り　第５９号　　令和３年３月１１日　山内

〇震災から１０年　－２０１１年　３月１１日－

あの日，あの時，私は県庁１６階の高校教育課で働いていました。もの凄いゆれ，机の下に潜りましたが机ごと吹っ飛ばされました。数分後，やっとゆれがおさまり，県庁花時計前に避難しました。彼岸が近いというのに肌寒く，雪がちらついていました。

私のふるさとは南三陸町，両親と兄たち家族が暮らす実家は海から１キロほど。寝たきりの父を母が介護して１０年ほど。もちろん当時は電話もつながらず，ラジオだけが情報源。

兄が勤める志津川には入れなかったので，姉が勤める津谷になんとか入れたのが１４日の月曜日。その時，姉から伝えられたことはいまだに受け入れることができないでいます。

あの時，町の人たちが寝たきりの父を助けに来てくれたそうです。母も一緒に。ところが，あの日は雪が降るくらい寒く，父に着せる上着や毛布，父の飲み薬等をとりに母は実家に戻ったそうです。仕事場にいた兄夫婦と町の人たちに助けられた父は救われましたが，母の行方は分からず仕舞いとなりました。それからの土日は色々なところを回って母を探しました。４０日ほど経った４月末の私の誕生日に母と似た女性が見つかり，兄が確認に行ったものの，別人との判断でした。それから４ヶ月ほど経過した秋口，DNA 判定の結果，４月に発見された女性は母と分かりました。私の誕生日に見つかった女性です。

あれから１０年，ふるさと南三陸伊里前地区は現在，防潮堤が立ち，町全体がかさ上げされ震災前とは全く別の風景が広がっています。兄たち夫婦も海から遠く離れた山間に住宅を建て直し，町の方々や母が命がけで救った父も一昨年他界しました。大きく変わりましたが，それでもいまだに２５００人もの方々が行方不明となり，福島県を中心に避難生活を送っている方々が４万人以上いるとされています。皆さんの中にも震災で大切な人を失った方もいると思います。あらためてお悔やみ申し上げます。

コロナ禍で色々なことが制約されていますが，震災時に比べればなんとも贅沢なことです。電気水道ガスといったライフラインも整っていて，電車・バスも普通に走っています。食べ物にも困ることはありません。でも，この当たり前の日常がどれほど貴重なことなのかをもう一度考えるべきです。今，ここに，自分がいることに感謝しなければなりません。家族，仲間がいることをありがたく思わなければなりません。一人一人を，一日一日を大事に過ごしてください。１０年前と同じ状況に直面したなら，より高くより安全な場所に急いで避難してください。決して戻ってはいけません。命より大切なものはこの世にありません。

ではこれで今回のつぶやきはお終いです。部活動もそろそろ再開ですかね。入試の合格発表は１６日。１・２年生の登校日は１７日からですね。